メイド？違うよ泥棒だよ

tomato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メイド？違うよ泥棒だよ

【Ｎコード】
Ｎ８６９０Ｖ

【作者名】
ｔｏｍａｔｏ

【あらすじ】
異世界にて前世もちの転生者がひたすら金品を盗み出すお話です、人情なんて（あんまり）ありません。

一品目

「リアンー！？洗濯物よろしくー！」

早朝いらないぐらい長い廊下を掃除していると頼まれごとをされた。

「はーい」

先輩のメイドさんに洗濯物を頼まれたので心で悪態をつきながら表面上は朗らかに要件を頼まれる。

「ちっ、この家は毎日毎日洗濯物多すぎだっつーの」

周りに人気がないことを確認して悪態をつきながら貴族のお嬢様と雇い主の旦那様・婦人の服を綺麗に手で洗う。

私の名前はリアン、良くも悪くも変わり者だと自分で自負している、なぜなら私は転生者、そう前世の記憶があるのだよ！

魔法も希望もあるのだよ、前世で普通に死んでしまった俺は今度こそ夢である『金のプールで泳ぐ』を達成しようと思った、が。

この世界はそう甘くはなかった、貧民と貴族、魔法を使えるもの使えないもの、その差は激しかった。

貴族と貧民の間の子であった私は父の顔は知らないが魔法の才能は少しばかり有ったのでよしとする、ああ、ありがとうお父さん。

まぁ男から女に生まれ変わっちゃったり母親がいなくなっちゃたりと大変だが、俺の夢に変わりはない。

「ふぅ、終わんねぇー」

この世界の生活レベルは中世並みで、汚い、非常に汚い、当然服も汚い、叩けば白い粉が出る。

そんな世界で貧民・平民に生まれた私は金のプールなんて夢のまた夢、娼婦は性病が怖くてやってられない。

魔法が使える私は考えた、せっかく前世の記憶があるのだから金もうけしようぜ？って。

才能のない私は一つしか魔法を使えない、だがそれで十分だ、周りの人間は私が魔法を使えると知らない、だから虎視眈々と狙い続けるのだ、チャンスを。

洗濯が終われば次はこの屋敷の一人娘を起こしに行く、思えば貧民出の私が侯爵家の屋敷にメイドとして雇われたのも魔法のおかげだ、ありがたやありがたや。

「お嬢様朝でございます」

「んぅー……」

眠たげに背伸びをして眠気を飛ばしベットのから降りてくる美少女、私と同じ年で１４歳、本当にこの世界の人間は馬鹿で助かる。

「ん……」

両手を肩まで上げて私に服を着させろと催促する、私は持っていた服をお嬢様が今着ている服と交換する。

この後は小奇麗な顔を洗面ボールで洗ってあげた後朝食となる。

「――――」

「――――」

朝食の時間侯爵家は一家団欒で食事をする、私たちメイドや執事は壁際でじっとしていないといけない、こういう時間も大切で侯爵一家のタイムスケジュールを把握するためにもちゃんと聞いておかなければならない。

私がやろうとしていることはばれたら極刑もの、速攻打ち首だ慎重にしなければ。

昼の休憩中に自分の財産を数える。

現在２４０００Ｇ、平民の一年間安心して過ごせる金額が１２００００Ｇだからかなりの物だ、だがまだ足りない、自分の夢はもっと遠いのだ。

数え終わった私はぼろっちいベットに身を沈め、ニヤリと哂う。

「明日で一年か……」

そう、明日で私がここに来てから一年だ、そして最後の日だ、この侯爵家に一年間務めるのが契約内容だった、正直つまらなかったし、わがままはきつかったし、後輩いびりは感動すらするぐらいだった。

特に仲の良い人間も作らず、悪い人間も作らず記憶に残らないように空気のように過ごしてきた甲斐があったというものだ、これで今日全てが終わる。

ベットの中からこの屋敷の見取り図を取出しもう一度確認して計画に不備がないか確認する、くくくっ、完璧だ。

屋敷の見取り図をどこで手に入れたかって？違うな、作ったのさ自分で、魔法を使ってな。

私の魔法の名前は『解析』本来は武器や防具の名前や質を確かめる魔法が使える者にとっては初歩の初歩のようなもの。

だが才能のない私はこれしか使えない、故に前世の知識をフルに活用して新たな可能性を見出した、それがこの見取り図だ。

家を『解析』して少しづつ作り上げたそれは完璧なもので、隠し扉の存在から屋敷の見回りの人間の巡回ルートなどなど全て事細かに書いてある……

ここまでくれば私が何をしたいか分かっただろう、そう泥棒だ。

「案外ちょろかったな」

小高い丘から月に照らされ青く光っている屋敷。

それを睥睨し片手に持つ侯爵夫人のイヤリングを手の平で転がす。

奪った金品はイヤリングやピアス、小さな宝石など目立たないものと、大きめのすぐ目につくような宝石と真珠のネックレス。

「明日になれば楽しいことになるだろうな」

顔が歪んでしょうがない、大きめのすぐばれる金品は町に置いておく、侯爵家の伝手で売り飛ばしたものはすぐに捕まえられる、だが目立たぬ小さめな、貴族の中ではありふれているものはばれないだろうし足も付きにくい。

「これで一品め……今度はもっと上手くやろう」

メイドはもうこりごりだ……。

一品目（後書き）

今回の盗みで貯金は

２４０００→８２０００

二品目

「これを売りたいのだけど、いくらで買ってくれる？」

そういって盗んだ宝石をカウンターに置く。

うひひ、街で見かけた人相の悪そうな男に宝石を拾わせて後をついていくだけでこんないい場所が見つかるなんて最高ね。

と、思ったのもつかの間――――

「６万Ｇだな」

「はぁ！？６万Ｇ！？ふざけんなよ爺さん！どう見ても１０万Ｇ――――」

そうだ、さっきの男は３０万Ｇ手に入れていた、ならこの宝石だって、少なくても１０数万は――

「なぁに知ったかぶっとるか小娘、盗品なんぞこれでも高いほうじゃて、そぅいえばさっき来た男の真珠はすごかったのー、誰のおかげで手に入れたのかは知らんがこうしゃｋ――」

爺完全に分かってやがるし！？どうしてわかった！？

心で驚愕していると爺さんはむかつく笑みを浮かべて此方を嘲っている。

「ひひ、どうするのじゃ？」

「わぁかったわよ！６万Ｇ！口止めもこみにしておいてよね！」

「おぉ、怖い怖いじゃあ商談は成立ということで、よいしょっと」

白髪頭の爺が棚の下から金庫を取り出して金貨を六枚取出し机の上に置く。

「ふんっ」

金色の硬貨が１万Ｇ、銀色の硬貨が５０００Ｇ、白い硬貨が１０００Ｇ、赤色の硬貨が１００Ｇで銅色の硬貨が１Ｇだ。

誰にも取られないようにそれをすぐに奪うと自分の財布に入れて厳重に裏ポケットに入れる。

「しかしお主も怖いもの知らずじゃな、貴族にケンカを売るなんて普通やらんわい」

「……私は何も知らないわよ？」

うかつなことは口に出さない、それがこの世界の掟というか、注意だ。

「そうじゃったの、ひひひっ、またのご来店をお待ちしておりますよ」

踵を返した私に頭を下げる老人、私は扉を開け手に入れたお金とともにある意味清々しい気分で外に出る。

「まだまだ私の人生は始まったばかりよ！」

少し重くなった財布に口を緩め、そして気を引き締める、そうだ私の夢は金銀財宝のプールで泳ぐことなのだから！

とりあえず次の目的が見つかるまでここら辺周辺を散策して金目のものがあったら考えておこう。

「すまない、二か月ほどここに泊まりたいのだけど」

とりあえず寝る場所だ、ということで人通りの多い場所に面する宿屋に行く。

「あいよ、１６００Ｇだよ」

するとすぐに女将から返事がやってきて私は困惑する、なぜなら宿屋の一か月の平均相場は１０００Ｇ前後、なのにここは一か月８００Ｇである。

「わかった、それにしても安いわね？」

「おや？あんた知らないのかい？」

上機嫌に話す女将。

「何をだ？」

「新しい王様が税金を下げてくださったおかげで物価が少し安くなったのよ」

「なるほどね、それと食事はいらないから」

「ん、それじゃぁ１０００Ｇでいいよ、これは部屋の鍵だから」

「ありがとう」

財布から白色の硬貨を一枚取り出して女将に私その代り鍵をもらう、この後酒場に言って情報収集しなくちゃね。

「マスター、苦くないやつ一杯ちょうだい」

「ん……」

辺りは冒険者や貴族、お姉さんやお兄さんの喧騒に包まれている。
ここのマスターは寡黙であるため私のお気に入りの場所だ。
お酒を一杯頼むとすぐに甘い果実酒が出される、琥珀色でとってもきれいだ。
「マスターなんかいい話ない？」
お金を余計につかませて何かいい話がないかと聞いてみる、すると。
「そういえば、王が新しい側妃の侍従を探しているそうだ、条件は侯爵以上の階級の下で侍従をしていたことだ」
「ふーん」
まぁ私も一応資格があるが行きたくない、お姫様の侍従なんてもうこりごりだよ。
そこで店の中央辺りのテーブルで品のない笑い声が響く、そちらを見やると昼に宝石を拾わせた男が数人の仲間とともに酒盛りをしていた。
「うるさいわね」
これだからこの世界の馬鹿は困るわ。
「お前の蒔いた種だろ？我慢しろ」

時が止まった、どーして知ってんだよぉぉおおお！？

「……どーしてばれてんのかねぇ」

「あそこの爺は俺の知り合いだ」

「あがが、あの爺今度会ったらただじゃすまさねぇ」

頭を抱えカウンターに沈みこむ、誰にもいわねぇんじゃねえのかよ？

「あんまり無茶するな」

マスターが少し困った顔で私を見てくる、あーあの爺殺す、絶対殺す。

「むぅ、ありがと」

どうしてかここのマスターは私に優しい、女って便利だなーぐらいにしか思わんが。

「それと――――」

マスターが何かを言いかけた時。

「御用だ！ここにライカンという男はいるか！」

店の扉を吹き飛ばして騎士たちが数人入ってくる、ライカンという言葉でさっきまで騒いでいた中心の男が青ざめた表情をする。

「あいつだ！捕えろ！」

最初に入ってきた赤い服を着た騎士が叫び、他の騎士たちが動き出す。

ライカンと言われた男は少し逃げた後、私を見つけて懐からナイフを出して走ってくる。

人質ってか？残念なことに私そんなになまっちょろく無いの。

私の首根っこを掴もうとするライカンの右手首をつかみ右に倒す、走った勢いのままカウンターに勢いよく頭をぶつけたライカンはそのまま意識を失った。

……ついでにお金も少しもらっておこう。

とっさに隠れようとするがすぐにばれ、逃亡する。

が、ここに逃げ場などなくすぐに捕えられそうになるが、視線の端に黒髪の侍従服をきた少女が映り、突破口を見つけ出す。

「くくっ」

そうだ俺はライカン様だぞ、こんなところで？まるわけがない。
懐からナイフを取り出して女を人質にしようと走る。
「しまった！？」
騎士たちが狙いに気付いたようだがもうおせぇ！
女の首根っこを掴もうとした瞬間女は俺の手首をつかんで片方の手で内側に押した、たったそれだけの動作で俺の軌道は変わり視界がカウンターの角に変わり、激しい痛みと共に俺の意識は途切れた。

『解析』の魔法でライカンの動きをくまなく解析して力の点をずらしてやった、するとあら不思議、簡単に人が転びました。
「協力感謝するよ」

「あ、はいお役にたてて光栄ですわ」

貴族であろう赤い騎士が私と会話している、ライカンは連れて行かれたので俺としては早くこいつに帰ってもらえないかなーとか思ってるんだけど。

「君はこの近くで侍従の仕事でもやっているのかい？」

多分この服を見て言ったんだろう、これだから貴族は嫌だ、替えの服なんて持ってないに決まってんだろ？

「いえ、この間お暇をいただきましたので」

無職でーす、私を知る数人の常連客が苦笑している、おいこらマスターも苦笑いするな！そんなに敬語がおかしいか！？可笑しいのか！？

「そうかい、もしよかったら僕の所で働いてくれないかな？」

煌びやかな金の髪の毛と金の瞳で俺を覗き込んでくる。

「私のような貧民での女子では騎士様のような立派なお方の所でなど――」

「金貨三枚」

私にだけ聞こえる声ではっきりといわれる。

「――――っ！？」

どうしてライカンから盗んだ金を！？

「そういうことをしていると怖いお兄さんがやってくるよ？」

馬鹿にしやがって……。

「ほ、ほほほ、何のことかわかりませんわね～ひゅぃっ！？」

せめてもの抵抗に白を通そうとすると頭を掴まれ耳に小さな声でささやかれる。

「逆らうつもり？」

「ぐぅ……分かりました」

悔しい！悔しい悔しい！こんな奴に！こんな奴に手玉に取られるなんて！

二品目（後書き）

現在１１２０００Ｇ

三品目

あの後店から強引に連れ出された俺は今とても混乱している。

「えっとぉ……なぜこんなところに？」

城だ、俺の目の前にあるのはこの国の城だ……あの後騎士に連れられて来たら何故かこんなところに、なんだ？ふざけてんのか？

「何故って、ここに僕は勤めてるからね、これからよろしく頼むよ」

城を背に俺に笑いかける赤色の騎士、ちょっと殺意が湧いたのは内緒だ。

そして俺は決意した、こいついつか殺したる。

あれから一週間ほどたって赤色の騎士の稽古とか日常風景を見てたんだけど。
殺してやるとか思い立ったのですが、訂正する、無理だわあきらめる。

俺は赤色の騎士、ジェイドって名前なんだけど、ジェイド様の御傍付としてメイドをやってんだけど……

「強すぎて勝てないだろ常識的に考えて」

そう、強すぎるのだ、さっすが王国守護騎士隊長マジパネェッス！魔法を使えば三人倒れ剣を振れば二人倒れる、なにそれ怖いんだけど。

だからこいつを殺すのはあきらめた、盗むだけ盗んで他国にでも逃げることにする。

「さっきから何ぶつぶつ言ってんだい？」

「いえ何でもないですよ？ジェイド様、汗臭いので近づかないでください」

訓練が終わり汗だくの気持ち悪い男が近づいてきたのでタオルと水の入った小樽とお昼の分のお弁当を投げ渡す。

「ひどいなぁ、リアンは」

「気持ち悪いのは本当ですから」

「まったく……スゥー」

タオルで汗を拭くのかと思ってたらそのタオルを顔にくっつけて深呼吸し始めるジェイド様。

「……何してんですか？」

「リアンの匂いを――」

「きもっ！？やめてくださいよ！」

前世が男とか女とかそういうのじゃなくて本当に鳥肌が立った、冗談っていうのは分かってるけど……

っていうかたぶんお日様の匂いしかしないと思うんですけど。

「冗談だよ、冷たくて気持ちいいなぁって思って」

「ずっと日陰にいましたからね」

こんな炎天下に外で走れるお前らの根性とガッツとやる気が凄いとしか言いようがないよ。

「ふーん」

汗を拭き終わりタオルと空の小樽を回収してその場を去ろうとする。

「なるほど、ね！」

私が後ろを見せているからと言って油断しているとお思いですか？
残念ながらそこはすでに解析の魔法の範囲内ですよ。
私を汗臭い体で抱きしめようとしているジェイド様の手の範囲からギリギリ避ける、本当は足でにやけた顔を蹴り飛ばしたいが、前にやったら足ごと吊り上げられたので遠慮する。
「……まったく、どんな手品を使っているか教えて欲しいものだよ」
「教えませんとも、ええ、教えませんよ、では私は仕事がありますのでさようなら」
少なくともエアハグをしているような奇人変人いは絶対にな。
それ以上この場にいても仕方がないのですぐに離れる、私はご主人の食事やら部屋の掃除やらで忙しいんですよ。
行ってしまったか……

しばらく悲しみのあまりエアハグから元の状態に戻れないジェイドであったが。

「隊長、何やってんすか」

「副隊長、これは悲しみのポーズだ」

愛を理解してもらえない俺の悲しみのポーズだ。

「はぁ、こいつ何とかしなくちゃ」

頭を抱えて悩む副隊長、どうした頭痛いのか？

「ところで何か用かね？副隊長」

「いや、隊長の所に来たあの子、いい目してますよね」

「そうだな」

彼女の目は何時もギラギラしている、常に求めている、そんな目に俺は惚れてしまった。

そして強引に俺の傍付の侍従にしてしまって色々と周りには迷惑をかけた。

「やらんぞ？」

「いりませんよ、隙を見せたら喉笛を噛み千切られそうです」

「ははっ、そうかそうか」

彼女はそこまで悪人ではないと思うがな。

※悪人です、いい人なんかになりませんしこれからもそんな予定はありません。

「死ね！死ね！糞！ロリコン！汗臭い！おらあああ！」

水と洗濯板でさっき渡された汗臭いタオルを洗う、薬草で油のぬるぬるが取れると思うなよおらあああああああ！！

泡が激しくたちジェイド様の汚い汗を水に浮かべさせることに成功する。

「はぁはぁ」

しかしまだ終わりではない、このままでは薬草の匂いが残る、ご主人は奇人変人でも地位だけは高いので薬草なんて庶民な匂いをつけさせるわけにはいかない。

「そんなに匂いが嫌なら自分で香水しろいつか殺してやるわ！こら

あああ！！」

匂い付きの白い粉を少量塗して綺麗な水の中でごしごし洗う、憎しみを込めて。

「ここか！？ここがええんか！？ほらほらほら！言ってみろよ！気持ちいですってなああ！」

そしていい匂いになった服たちを誰の目もつかないところで干してこの作業は終わる。

「ふぅ」

ストレスを発散して洗濯物を籠に入れて後ろを見ると目を丸くした赤色、いや緋色の髪と瞳を持つ少年が立っていた。

「……」

「……何処から見てた？」

「死ね死ね糞ロリコン――――」

「うわあああああああああ！！」

つまり最初っからじゃねえかあああ！！

「君たしかジェイドの所の御傍付き侍従だったよね？」

こんなことがジェイド様の耳に届くとこれを口実に何されるかわかったもんじゃない。

「仕方ない殺すか」

坊主ー、世の中にはな？そんなこと屁にも思わないような奴が多いんだぜ？

「ええ！？」

「大丈夫だ、安心しろ痛くないから」

解析の魔法を使って辺りに俺と彼しかいないことを確認して笑顔で彼に近づく。

「大丈夫じゃないし安心できないよ！？やめてよ！どうしてこっちに近づいてくるの！？」

「逃げるなよ坊主……そっちは壁だぜ？」

今頃気づいたか坊主、お昼のこの頃はここには誰もいないんだぜ？

「ひっ、待って！誰にも言わないから！」

「信じんな、そんなこと」

一歩少年に近づく、少年の顔が青ざめる。

「本当だよ！誰にも言わないから！」

「そんなことより殺してしまったほうが楽だな」

ますます青ざめる少年とあと数歩で正面に立てる俺。

「金貨一枚でどう！？」

「仕方ないそれで許してやろう」

金の力には勝てないからな。

「よ、よかったよぉ～」

へにゃへにゃとなってへたり込む少年。

「まったく根性が足らんな」

「どの口がそれを言うかなぁ、ほんと」

とりあえず懐をまさぐり財布を見つけると中から金貨一枚を取出し、ってこいつ財布に金貨一枚も入ってんのかよ、ブルジョワめ。

「じゃあ俺はこの辺で、誰かに今日のことを喋ったら七代先とは言わずに今代で根絶やしにしてやる」

「う、うん！誰にも言わないよ！」

ふひひ、金貨一枚だなんてラッキー。

そそくさと俺は仕事場に戻った。

「怖かったぁ……」

ちびりそうになったよ、あのお姉さん怖すぎ。

「でも」

怖かったが、不思議ともう一度会いたいと少年は思った、きっと明日もここに来るだろうと思い、少年は誓う。

「あの子と友達になって見せる！」

そう決めた少年は緋色の髪と目の持ち主、皇族の証である緋色の持ち主であった。

少女は気づかない、自分がとんでもない事をしでかしてしまったことに。

「後悔なんてねーし、反省もしねーしー」

いまだ気づかない少女は食事の支度が遅れてジェイドに小言を言われていた。

まあ、気づかないほうが幸せかもしれないが。

三品目（後書き）

財布１１２０００Ｇ→１２１８００Ｇ

生活費は一日３３Ｇほどだから、物価は超安いことになります、一年で１２０００Ｇとか少なすぎましたね、すいません。

いい感じにできないものか思索中、ＤＱって物価高いよね宿代の割には。

四品目（前書き）

毎回何かを盗むのは意外と難しいと思うこのごろ。

四品目

「あっついなぁ」

「ねぇねぇ」

こんな糞暑い中洗濯だなんてどうかしてるよ。

「まぁ、あの家よりはまだいいか」

「ねぇ～」

苦々しく思い出に残るのは前に使えていた侯爵家の我が儘お嬢様のこと。

一日に五回も服を着替えなおしてその服は全部洗いなおさなければならない、本当に疲れた。

給金が高くなければ本当に逃げ出していたところだ、給金といえばここで働く賃金は侯爵家でもらえる賃金よりも若干安い、その分仕事は楽なので考え物だ。

「はぁ……」

「ねぇってばぁ」

「なんですか鬱陶しいです死んでください」

「酷い！」

先ほどから周りをうろちょろ鬱陶しいのは昨日であった緋色のガキ、昨日に懲りず今日も同じ場所で出張ってやがった。

「で、何か用件でも？」

お金なら返さないよ？

「僕の話し相手になってよ」

「丁重にお断りします、帰れ」

「なんでだよ～」

こっちが汗水垂して働いているっつーのに涼しげな顔で井戸の縁に肘をかけて此方を覗うその姿がどうにも殺意を誘う。

「私には仕事がありますから暇な貴方とお喋りする時間なんてありません」

「えーいいじゃん少しぐらい」

はーめんどくさい。

「……洗濯しながらでもいいならいくらでもどうぞ」

「ほんとに！？やったぁ！」

こういう輩は引き下がらないのはよく知っている、だから仕方がなく喋ることにする、別に洗濯中は誰もいなくて寂しいとかそういう

のではないからな。

「リアンって好きなものあるの？」

「お金が好きですね」

ジェイドの服は赤色が多いな～、やっぱりこの国の国旗が赤だからか？

「嫌いなものは？」

「特にありません」

ああ糞この服の汚れ落ちにくいなぁ、後で棒で叩かないと。

「なんでお金が好きなの？」

「……別にあなたには関係ないでしょう」

「むぅ」

さてこのぐらいで止めにしますか。

「この辺でおいとましますね、さようなら」

「うん、また明日ね」

明日も来るんかい！

今日も頑張った私、頑張ったご褒美は侍従用の共同お風呂でございます、ひゃっはーテンション上がるねぇ。

「おつかれさまでーす」

脱衣所で服を着たり脱いだりしている女の人たち、この人たちは全員私の同僚だ。

「あらリアン、今日は早いねぇ」

私に気付いた同僚の一人が私に声をかけてくる、侍従仲間とは仲は悪くない。

「はい、ジェイド様が王様に呼び出されたみたいで早めに上がっていいと」

「ああ、そう、なのっと」

私より頭一つ大きい同僚は服を一気に脱ぐとたわわな実が元気よく飛び出し肌色の艶めかしい大人の体が飛び出てくる。

「はい、なのですぐにお風呂に入ろうと思いまして、今日は熱かったです、しっ」

それに準ずる形で私も同じように勢いよく服を脱ぐ、何の抵抗もなく脱げ元気よく飛び出すものはないが若干膨れたその実はその筋の人間には人気だろう。

体を洗って湯船につかることにする、周りを見回せば一日の疲れを洗い流してふにゃふにゃになっているふにゃメイドたちが、至福の顔で湯船につかっていた。

「ふぁー気持ちいいなぁ」

湯船につかっている間も楽な金の手に入り方を考える、やっぱりリスクは大きいけど盗みが一番かな。

銀行には一気にではなく少しづつお金を貯めている、この世界では平民が一気に大量のお金を銀行に預けると国に通報されて身元を確認されるのだ。

あー怖い、銀行のこの制度を店のマスターに教えてもらえなかったら捕まるところだったよ。

「ねぇねぇリアン」
いきなり声をかけられる。
「……はっはいなんですか？」
危ない危ない、寝る寸前だったよ。
「ジェイド様のことどう思う？」
声をかけてきたのはさっき話をしていた女の人、後ろに何人か同僚を引き連れている。
「……どういうことで？」
「何ってジェイド様とミレイユ様のことよぉー」
「どうだった？ねぇどうだった？」
ジェイド様とは私の遣えるご主人様だ、ミレイユ様っていうのは王国守護騎士隊の副隊長のことだ。
「あーそうですねぇ、今日も二人で何かしらくんずほぐれず遊んでましたよ」
「きゃー！」
私の少々というか多量に湾曲させた言葉を聞いたうら若き少女たちはその場で黄色い悲鳴を上げる。

「やっぱり二人は好きあっているのよ！」

「でもジェイド様には婚約者がおられるんでしょ？」

「それがいいんじゃない！」

「「きゃー！」」

ついでに言っておくが副隊長は男だ、オスだ、マンである、間違ってもウーマンではない。

「は、ははは……」

どの世界でもそういうのが好きな女の人はいるものである、前世でもあったが俺は面白ければ読む派なのでなんでもござれだ、まあそのせいで友達に引かれたりしたが。

でもオジサン×筋肉はいかんせん無理があるだろ、とかは突っ込まない、筋肉×筋肉もだ。

女の人たちの腐ったバナナの色の声を聴きながら湯船につかる、いい湯だなぁ。

お風呂から帰ってきて自分の部屋に入る、部屋はジェイド様の部屋の近くで、すぐに部屋に行けるようになっている。

「あー、いつ抜け出すかなぁ」

私はこの国の人間ではない、故郷といえる場所は貧民の生まれる場所で死ぬ場所だ。
正直この状況だけでもかなり恵まれている。

「糞っ、あの餓鬼のせいで今日は嫌に胸が気持ち悪い」

この世界に生まれる前の記憶、いつも俺は不満を持っていた、いつかこの胸のつかえもとれるだろうと思い生きてきた。

「ああもうっ！寝よ！」

加速する思考を止めようと思い、布を体に巻きつけ固い木の上に布を重ねただけのベットに横たわる。

「……」

月の光がほんのり部屋を照らしベットの上に広がった自分の黒い髪

の毛を眺めていると次第に意識が飛んでいきやがて完全に眠った。
明日もあの餓鬼に会うのだろうか？そう思いながら。

夢だ、遠い昔の灰色の夢。
まだ自分がこの世界に生まれて間もない時に母さんはどこかに行った、たぶん今頃どこかでのたれ死んでるんだと思う。

ごみ溜めのような街だった、誰もが血の気のない灰色と黒色の中間の顔色をして目だけがギラギラと輝いていた。
貧民だった私は小さな体で鼠や虫を捕まえて焼いて食べたり店に置いてある食べ物を盗んだりしていた。

ある日お世話になっているこの国の宗教をやっている貧乏な教会に行くと大勢の汚い男たちが誰かを囲んで何かをやっていた。
前世の知識を持っている自分は青臭いどこか吐き気がする匂いとチーズの様な据えた匂いに何が起こっているのか理解した、いやさせられた。

男たちが帰って行ったあと世話になっていたシスターの死体を見つめても何の感情も出てこなかった、むしろ同じ人間なのかと疑ってしまうほどその体は汚くなっていた。
教会に入ると魔法についての本が置いてあったのでそれを使って魔法を使えるようになったのには感謝していたと思う。

教会には誰も来なくなり、シスターの死体も誰かが持ち去っていった、食べるのか売るのか性欲処理に使うのか、それは私には知る由はないけれど。
灰色の世界の私はみんなと同じギラギラした目で雨が降る天を見つめていた。

確かその日の雨はしょっぱかった、様な気がする。
力が、お金がなければこの世界では生きていけないのだ。

四品目（後書き）

なんかあんまりおもしろくないなぁ、テンプレ乙な状況だと思う。

五品目（前書き）

遅れてすいません…構想を練ってたらいつの間にかこんなに時間が、本当にいつの間に…

五品目

ふと目が覚めるとまだ夜が明けていなかった、たぶん三時くらいだろう。

「……クソ」

気持ち悪い、本当に気持ち悪い……。

「っ……」

あの顔が、汚い体が、下品な男たちの群れが私に向かってくる。

「ふんっ雑魚のくせに」

そういうやつらは全員おちょくって逃げてやった、何人か生きているかどうか分からないぐらいやっちゃったけど、この世界ではそれが常識なんだ。

深く考えすぎたらしい、気が付くと私の部屋に日差しがかかっていた。

「あー寝汗かいた、最悪だ」

固いベットから起き上がって固くなった筋肉をほぐす、温まった体と汗ばんだ体の熱が朝の冷気に吸われるのはとても心地が良かった。

「今日も快晴快晴！」

メイドの一日は清掃から始まる……はっ！？俺は泥棒だ！メイドじゃねえ！

「くそぅ、メイドが板についてきやがるぜ」

長い廊下を歩きながら先輩のメイドにあいさつする、夜と朝の交代制で一日２４時間ずっとメイドは働いている、私？ジェイド様の御付なんで用がある時だけですよ。

ジェイドの部屋の前に立つ、解析の呪文の無駄遣いで部屋の中の主がまだ寝ているかどうかを確かめる……起きてるよー、超起きてるよー、扉の横で待ち構えてるよー。

「だめだあの変態、変態すぎる」

白い扉を睨み付ける、あんな変態馬に蹴られて大腿骨を折ればいい。

「ジェイド様ー起きてますよね？というかそこの扉の横にいるのは分かってますよ、と言うわけで朝食にしますよー出てきてくださーい」

あー駄目だ眠くて口調が間延びする、寒い。

「何で分かったんだ？」

「それは秘密です」

可愛らしく人差し指を口に当てる、技術っていうのは伝承させないものなのさ、誰しも利益は取られたくないからね。

パジャマ姿のジェイドを可愛いと思ってしまったのは一生の不覚だ。

「抱きしめていいかい？」

「死ね屑早く着替えろ見苦しい」

「お父さん悲しい！」

「ＨＡＨＡＨＡ」

このウザいキャラさえなければいい男なんだけどなぁ。

ジェイド様は食事が終わるとすぐに仕事が待っている、王国守護騎士隊長様は剣や魔法だけではとても勤まらないのであった。

「まあ要約するとジェイドざまぁ」

副隊長に首根っこを掴まれて情けなく連れて行かれる姿はかなり笑えた、あと少しで腹筋が崩壊するところだった。

「君は何を言っているのさ？」

「あーお子様には分かんないことなんだぜ」

何時もの場所で赤髪の少年と話す、話しやすいので最近重宝している。

「君だって子供じゃないか」

「ははは！私は１４歳だよ、口を慎みたまえ」

「え、僕より３歳も年上だったの？」

「「……」」

「い、いたっ！ちょっ痛い！痛いよリアン！」

無言で脛を蹴る、あーうざい、すげーうざい。

「なんだ！お前が、言いたいのはっ、つまり、俺背ーたけー、って、ことだろ！」

「だから痛いって！言葉と一緒に蹴らないでよ！っていうかどうして同じ場所ばっかり蹴るのさ！」

「うるさいやい！」

背が低いわけじゃない！ここの世界の人間が大きすぎるだけだ！

そんな風に（ガキで）遊んでいるといきなり解析魔法に人が掛かった、しかも武装をしている。

「えーまじでー」

「どうしたの？リアン」

弓を持った人間が赤いガキに矢を放つ。

「ちっ！最悪！」

一体なんなのか分からないがとりあえずこいつを守らなくては、ガキの手を引っ張って私と共に井戸の陰になるように倒れこむ。

「わぁっ！？な、何するんだよ！リアン！」

顔を真っ赤にしているガキ、呑気なものだぜ、私は胸を触られたぐらいではどうとも思わんというのに。

ガキが起き上がろうとした瞬間頭の上数センチを矢が通り過ぎていく、おいおい、石で出来た壁に突き刺さるって、どんな威力だよ…。

これはやばい、どのくらいやばいかというとジェイドの二分の一くらいやばい。

二分の一だからと言って舐めるべからず、あの男は存在がチートなのだ、１００の半分が５０だとしても自分が５０より上とは限らないのだ。

「ど、どうしよう！リアン！」

「馬鹿野郎！俺たちも足を使うぞ！」

「え？足？」

「逃げるんだよ！スモーキー！！」

「どうして僕の名前知ってんだよー！！後置いてかないでー！」

え、お前スモーキーって名前だったの？

新たな発見。

六品目（嘘）

今日は厄日だ、そうに違いない。

「伏せろ糞ガキ！」

「ぬあ！」

頭を押さえた手の数センチ上を黒い矢が通り過ぎる。

「あ、ありがと…」

矢はそのままの勢いのままどこかへ飛んで行った、誰にも当たりませんように。

「不味いな…」

私一人だったらどうにでもなるけど…はぁ、仕方ない。
糞ガキと言えど子供が死ぬのは忍び難い…それに謝礼金も欲しいしね。

「先に行け、それでジェイド様を呼んできて欲しい」

「リアンはどうするの！？」

「時間稼ぎぐらいはできる」

「でも！」

これだからガキは面倒くさいんだ…

「いいから早く行け！死にたいのか！？」

「っ！分かった！すぐ呼んでくるから！」

はぁ、面倒くさいことになった。

メイド服のスカートの裏地に縫い付けてあった両刃のナイフを取り出す。

「貴様……」

先ほど私たちに弓を執拗に打ってきた男とその仲間の三人が追いついてきた。

「はぁ、面倒くさい奴ら」

トントントンと足を踏み肩の力を抜く、解析魔法で相手を調べようとするが魔道具で防がれた、かなり高度な魔道具だな、このレベルの魔道具となると…。

「神聖皇国か…」

夢と言い、こいつらと言い、私をイラつかせるのが好きみたいだな。

「……何故わかった？」

「何でだろうねぇ、それより神聖皇国の犬が一体この国に何の用？

お前らの神様は戦争でもしろってか？」

「アステル神への侮辱とみなす、背信者め！」

「はっ、狂信者が、自分の国に帰ってマスでも掻いてろ！！」

その言葉を皮切りに矢が放たれ、後ろに控えた奴らが突っ込んできた。

「らぁっ！！」

弓以外の奴はそこまで錬度が高くない、まぁそれでもこの国の兵士よりかは強いがな。

だが、軌跡が分かっていれば当たることなどない！

懐に飛び込んで右の脇の下をナイフで切り抜ける、鎖帷子か…ナイフじゃ無理だな、私の腕力じゃあれを切れない。

「ぐぅ！？」

防いでいない肩につながる筋肉を切ったので左手は使えないだろう。

「どけ！」

そこに弓矢使いが矢を放つ、こいつ味方ごと殺す気か、ありがちで乙。

「よっ」

頭を下げて矢を避ける、まさに当たらなければどうと言うことはない、だな。

「ぐあっ！？」

何が起きたかわからないという風に背中に矢を突き刺されて倒れる敵兵Ａ。

「味方ごとってかぁ？」

「我らは神の使徒、安寧とした死後を約束される我らにとって死など恐るるに足らん」

「はん、地獄とか天国とか神様とか信じてるお前らマジ気持ち悪いから、さっさと死ねよ」

「きさまぁあぁぁ！！」

無精髭の男が短剣で突っ込んでくる、だから当たりさえしなければ怖くないっつーの、後ろから矢が背中に刺さっている男が突っ込んできていたので避ける。

「なぁ！？」

挟み撃ちで殺せると油断していたのか無精髭の短剣が背中に矢が刺さっていた男の喉下あたりに刺さり今度こそ本当に死んだ。

「馬鹿な…貴様、どんな魔術を使った？」

「ははっ、誰がそんなこと教えるかバーカ」

さすがにこいつは倒せそうにないなー、やばいなぁ、どうしようかな。

「……ちっ、貴様さえいなければ…撤退するぞ」

「な、何故ですか！？」

「標的が逃げた時点でこの作戦は破綻した、もうすぐ兵士がここに来る」

「ぐぅ…」

弓の奴が踵を返して走っていくのに続いて他の奴らも逃げていく。

「ふぅ…」

「リアン！無事か！？」

遠くからジェイドが走ってくるのが見える、はぁ、来るのが遅いよ。

「遅いですよご主人様」

「すまない、侵入者は？」

「とっくに逃げましたよ……ところでジェイド様」

「なんだい？」

「何故私のお尻を撫でようと？」

「そこにあったから…」

「死ね！」

もちろんナイフでついてやりましたとも、ええ、まぁ簡単に防がれましたけどね！

「ナイフは没収！」

「えー」

刃物はだめらしい……。

この後執拗に触ってくるうっとおしいジェイド様と糞ガキの相手に大変でした。

はぁ、今日は厄日だ。

「リアン…」

「ジェイド様？」

その夜自分の部屋で就寝しようとしていると、ジェイド様が入ってきた、なんですか？夜這いですか？そういうの趣味じゃないんでどっか行ってください。

ベットに腰掛けていると勝手に横に座られた、いや、やめてくださいよ、皺になるでしょ？

「……」

「……」

そういえば今日はあの後取り調べを受けて夕食食べれなかったんだよなぁ、とんだ厄介だったぜ…。

「今日は本当にすまなかった…」

最初に沈黙を破ったのはジェイド様、まぁ私はしゃべる気なかったけど。

「あー、別に気にしてないですよ、それにジェイド様はちゃんと駆けつけてくれたじゃないですか？それで充分ですよ」

「リアン…！」

「うっ…」

感極まったといった態で肩に手を乗せ顔を近づけてくるジェイド様。

「はい、ストップ、そういうことは他の貴族の女性にでもやってもらってください、私そういうの面倒だからしないでほしいです」

「ちっ…」

「いや、舌打ちしないでくださいよ」

「何が不満なんだ？」

「別に？不満なんてないですよ、私があなたを愛せないだけですよ」

「くそぅ…今日は行けると思ったのに」

それ毎日言ってますよね？

「無理ですって」

「じゃぁ、いつになったら振り向いてくれるんだい？」

「さぁ、どうでしょうか？」

損得勘定以外の感情なんて私が持つでしょうかねぇ？

六品目（嘘）（後書き）

ううう、下手糞な文ですみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8690v/

メイド？違うよ泥棒だよ

2011年11月9日01時03分発行